

古き良き町の姿を 後世へ伝えていきたい

広報ごじょうめ平成8年4月号から連載が始まり、今月号で節目となる300回を迎えた人気コーナー「ごじょうめのわらしだ」。
25年にわたって、昭和30年代の五城目の子どもたちの暮らしの様子を描き続ける作者の大石清美さんへ、作品にかける思いを伺いました。

毎日が楽しかった 記憶に深く残る少年時代

町の昔の様子を描いたイラストの展示会を五城館で行い、作品を見た町の職員から「広報に掲載したい」と頼まれたことがきっかけで広報誌への連載が始まり、気付けば今月号で300回を迎えました。「よくここまで続いたなあ」というのが正直な気持ちですが、読者からの「毎月楽しみにしている」「これからもがんばって」などの励ましの声があるからこそ、描き続けることができたのだと実感しています。

毎月の作品で描いているのは、私が小中学生のころの町での暮らしの様子です。当時の私はとても自由奔放で、気になったことがあれば何でも真似してみたり、作ってみたくなったりする好奇心旺盛な少年でした。

当時は今のように便利な世の中ではなかったので、日々の暮らしの中でたくさんのお話を絞りましたが生活してました。近所の方や町の方は皆何かの先生で、私の知らないことや気になったことを詳しく教えてくれました。

そのころを振り返ると、「次はもっと工夫してみよう」「明日はどんな新しいことができるように

なるだろう」と、日常生活の何もかもが楽しく、毎日が希望に満ちていました。欲しいものが何でも手に入るわけではありませんが、手が「何もなくても何かがある」と考え、得た知識や技術を応用し、あるものを使って様々な遊びを編み出しました。

読者からは「昔のことをよくそんなに覚えているね」と言われることがありますが、毎日の暮らしの中で楽しみながらも苦労して身に付けてきた知恵などは、60年以上経った今でも忘れることはありません。

それぞれの捉え方で 作品を感じてほしい

当時のできごととは思いつくても、細部までとなると分からないことがあります。そのため、作品を描くにあたり、必ず資料集めをします。その時間がいちばん好きで、懐かしいものなどを見ては当時の楽しかった思い出が鮮明によみがえります。

その際、町のあちこちを訪ねることがありますが、昔あったお店はなくなり、外で遊んでいる子どもたちも減り、寂しさを感じることもあります。だからこそ、いつの間にかなくなってしまう遊びや習慣、仕事など、町の古き良き姿を描き、今見ていただいている方、そして後世へと伝えていければと思っています。

連載300回という節目を迎え、「そろそろ引き際かな」と考えたこともありましたが、それを上回るほどの、まだまだ皆さんへ伝えたい、記録として残していきたい町の良いところがたくさんあります。

体力が続く限り連載は続けたいと思っていますので、これからも作品に目を通していただき、当時を知る方は「懐かしいな」と、知らない方は「昔の五城目ってこんな感じだったんだなあ」と思っただけであれば幸いです。

大石清美さんから 読者の皆さんへプレゼント!

連載300回を記念し、大石清美さん特製の、ごじょうめのわらしだ2(第241回～第300回のイラスト集・1名)、ひょうたん招き猫(2名)、杉の木コースター(3名)をそれぞれ抽選でプレゼントします。

ぜひ、ご応募ください!

- ▶ 応募方法 はがきに、希望賞品名・住所・氏名・電話番号と「ごじょうめのわらしだ」へのご意見や感想、またはお気に入りの作品をご記入の上、ご応募ください。
- ▶ 応募先 〒018-1792 五城目町役場まちづくり課 300回記念プレゼント係
- ▶ 締め切り 3月31日(水) 当日消印有効
※写真はプレゼントの例です。
※当選者は、広報ごじょうめ5月号で発表します。



大石 清美さん

町広報に毎月連載の「ごじょうめのわらしだ」作者。秋田市河辺で「あすなる印刷」を営む傍ら、毎週月曜日には、FM橋台のラジオ番組「ばんげだい橋台」に出演する。下山内出身。72歳。



300回の連載を誇る「ごじょうめのわらしだ」の中で、大石さんがお気に入りの2作品。

「学校終わりに駄菓子屋へ毎日のように通ったことや、お祭りの日に友人と一緒に遊んだことが思い出される」とのこと、描く際の資料集めが特に楽しかったそうです。(右は平成15年2月号、下は平成26年10月号に掲載)

